

平常心と安全

西堀 栄三郎*

Usual Mind and Safety
Eizaburo NISHIBORI*

10代の頃の私は、今でいう暴走族であった。オートバイが珍しかった時代にアメリカ製の大きなインディアンを乗り回して、随分無茶をしたものである。真夜中の京都の町をかなりのスピードで走っていたときに、カーブに気がつかず、そのまま疎水に飛び込んだことがあった。また、走って来るトラックと正面衝突したときは、オートバイは見事に吹き飛ばされたが、私はとっさにトラックのラジエータに飛び移って難を逃れた。いずれの場合も、私はケガひとつしなかった。

ケガをするかしないかは紙一重の差である。その差は、アクシデントにとっさに対処できる身のこなしと冷静な心構えができていのかどうかにかかってくる。私はこれを平常心と呼んでいる。私が平常心を体得したのは、三高に入って山登りの修業を始めてからであった。

山登りには常にアクシデントがつきまとう。あらゆることを予測して行動しても、思わぬ事態に直面するものである。そのときに平常心があれば、事態を克服する道が見い出せるのである。私は平常心によって、これまで幾度となく虎口を脱してきた。

立山で、大きなリュックサックをかついだまま、丸木橋から下の激流へ落ちたことがあった。ここで動揺するとそれまでだが、平常心で冷静にしていると周囲がよく見えてくるのである。流されながらリュックが引っかかるような間隔で大きな岩が2つ並んでいるのを見つけると、そこへ体を寄せていき、首尾よくリュックを引っかけることができたが、すぐ下は滝であった。

穂高では、まさに間一髪のところ助かったことがある。畳岩という一枚岩の斜面で、輸入したばかりの靴の裏に打つ釘の性能を試していた時であった。そこは、上から石を落とすと、全く斜面に触れずに遙か下の雪溪まで落ちていく急斜面である。あと少しで登りつめるという所で、釘が効かずに足を滑らしてしまった。その瞬間、頭にひらめいたのは、「俺はどうすべきか……できるだけ斜面との抵抗をつくって、転落を止めなくてはあかん」と同時に、私はできるだけ体を柔くして、顔中すりむけようが、レジスタンスになるところは全部使って、岩に吸い着くようにへばりついたのである。どうにか体が止まった。上に引っ張り上げられたときは、チョッキがボロボロになっていた。この間の時間は、物理的には1秒足らずの瞬間だが、私には非常に長い時間で、いろいろと考える余裕が生まれてくる。心が平静であればある程、この瞬間を長く感じ、冷静な状況判断と行動を可能にするのである。

こうした平常心を、私は日頃の訓練で身につけてきた。雨中でも火をたく方法、どんな山の中でも、すぐその場で横になって眠れる練習、食料がなくなった時の絶食の練習など、いつ、いかなる場所でも生きていける修業を積んできた自信が、平常心を培うのである。ただし、こうした修練をしていると、他人に対する同情が薄れてしまうので困る。植村直己君が北極で食料の補給に苦労しても、「なあに、3、4日くわへんでも死なへんわ」といった調子になってしまう。私もヒマラヤや南極へ行ったが、危険を冒していると思ったことは1度もない。それは、考えられるすべての状況を予測して準備した上に、平常心をもって行動するからである。

安全の問題を考えると、機械や施設、規制などで安全を確保する一方で、不測のアクシデントに対する身構え、心構え、すなわち平常心を養っておく必要があると思う。

* 日本山岳会会長
President, Japanese Alpine Club